

ガレルヌの彷徨を追つて

——ラ・ロッシュジャ克蘭侯爵夫人『回想録』抄——

西 節 夫

## 序章

ヴァンデの反乱は、伝説が歴史を補充することによって、初めて完全な解明が可能になる。全体像を捉えるためには歴史が必要だし、細部を知るためには伝説が必要なのだ。

ヴァンデの反乱はそれだけの労をとる価値があると、はっきり言っておこう。ヴァンデの反乱は一つの驚異なのである。

ヴィクトール・ユゴー『九十三年』<sup>(1)</sup>

## 一 ヴァンデ・ふくろう党の戦跡めぐりと本稿の目的

昨一九八八年度、大学の研修制度によって滞仏の機会を得、その間に、ヴァンデ・ふくろう党の反乱の舞台となった地方を処々訪れることができた。この戦跡めぐりを企てた理由については、今春帰国してからまもなく、大学側に提出した「研修レポート」中に次のように記したが、ほぼ尽くされていると思う。

「この反乱の発生と展開には、その舞台となった西部・北西部諸地方の地勢や土地柄をぬきにしては理解し難いと思われる面があること、また、バルザックの『ふくろう党』に限らず、この戦いを題材にしたバルベール・ドルヴィイ、ユゴーなどの作品においても、それらの要素が極めて大きな意味を担っているといった

事情に加えて、史実の物語化、伝説化の問題に関心を持つ立場から、広範囲にわたった大革命中最大のこの反乱について、それぞれの地元で、一体どのように語り継がれ、また語り継がれようとしているのかを知りたい——その点で、なにがしかの発見があればと考えたのが、その理由<sup>(2)</sup>である。

ヴァンデ・ふくろう党の反乱の舞台は、南はポワトゥーから、アンジュー、メーヌ、ブルターニュ、そして最北はノルマンディーにいたる旧五州にわたっている。そこで、どんな市や町を、どういう順序でめぐるか、当然選択せざるを得なかったが、筆者は主として、この戦いのなかでも最も叙事的な事件であったと思われる、ガレルヌの彷徨を追う形で進めることにした。結局、次のように五回に分けて、反乱ゆかりの市町村を訪ねることができた次第である。

一九八八年十月十七日～二十一日

サン＝フロランシール＝ヴィエーヌ (Saint-Florent-Le-Vieil)′  
 ボープレオ (Beaupréau)′  
 ショレ (Cholet)

同 十二月二日～四日

エルネ (Ernée)′  
 フージエール (Fougères)′  
 クータンス (Coutances)′  
 グランヴィル (Granville)′  
 アランソン (Alençon)′  
 キルターニヨ (Mortagne)

同 十二月二十二日～二十四日

サヴネー (Savenay)′  
 ナント (Nantes)

一九八九年三月十七日～十九日

ラヴァル (Laval)・レンヌ (Rennes)

同 四月三日～七日

ル・マン (Le Mans)・ナント・サン・フロラン・ロルヴィエーユ

この戦跡めぐりは、文字通り、思いがけない出会いと発見の連続であったように思う。地元の方々の厚意に恵まれて、資料収集の面で予期していた以上の成果があったばかりでなく、実に貴重な数多くの見聞を得ることができたが、それはまた、さまざまな意味と次元において、筆者の知るべきこと、考えてみるべきこととの多さを痛感させられた現地調査でもあった。なによりもまず、ガレルヌの彷徨について、体験者である目撃者の、それもなるべく断絶の無い証言に渴望を覚えたゆえんである。

そこで、本稿において、ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人の『回想録』(Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein)を主たる証言としながら、筆者がそれぞれの地元で見聞したことをいわば注記する形で、ガレルヌの彷徨を追ってゆきたいと思う。ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人は、ガレルヌの彷徨の最初から最後まで、その主流のなかでも常に中心部にいた——言ってみれば、彼女が生き残ったことを除いては、ガレルヌの彷徨の最も完全な体験者のひとりであって、しかもこの彷徨の語り部として、他の体験公刊者の誰よりも意欲的であったとみなされる人物である。本稿で、具体的な事件を題材にして、歴史と文学との関係、例えば歴史小説の問題などといったものを考察する意図はない。また、歴史研究の方法論、例えばアナー

派のそれなどを特に意識するといった余裕もなければ、所詮その資格もない。もっぱら夫人の『回想録』を読むこと、そしてガレルヌの彷徨について学ぶことが拙稿の目的である。したがって、恐らく、筆者の無知無学が動機の覚書に終始するだろう。

ところで、ガレルヌの彷徨とは、おおよそいかなる事件であったのか。ここで、その概略を述べておく方が本稿の構成上適当であると思われるし、また、同じ理由で、ラ・ロシュジャクラン侯爵夫人についても、その生涯を一瞥しておきたい。さらに、彼女の『回想録』の成立過程と版の問題に関しても、本序章で見てもおく必要がある。

## 二 ガレルヌの彷徨の概略

西部の農民たちが、国民公会による三〇万人の強制徴兵令に反発して、少なくともそれを直接的なきっかけとして、各地で一斉に蜂起したのは一七九三年三月中旬であった。彼らヴァンデ軍は、「神と王のために」を旗印にして戦い、一時は、相次ぐ勝利によって国民公会を大いに脅かすが、同年六月二十九日のナント攻囲に失敗したのを境にして、共和政府軍の反撃の前に守勢に立たされるようになる。そして、同年十月十七日、シヨレ近郊の会戦に敗れるやいなや、兵士たちだけでなく、彼らの家族をはじめ一般の住民までが、政府軍による焼打と虐殺を恐れて、パニック状態のなかで、ロワール河岸へと潰走し、翌十八日にはその大部分が、また一部は十九日にかけて、サンフフロランソールヴィエーユからロワール河を北岸へと渡ってし

まう。その数六万に上ったが、うち戦闘員は二万に過ぎず、他は老人婦女子であった。これがガレルヌの彷徨の始まりである。

彼らヴァンデの反徒たちは、ふくろう党の歓迎を受けながら、スグレ (Segre)、『シャトー＝ゴンチエ (Château-Gontier)』、『ラヴァル』、『マイエヌヌ (Mayenne)』、『エルネ』、『フージエール』、『ドル (Dol)』、『ポントルソン (Pontorson)』、『アヴランシエ (Avranches)』といった北西部の市や町を次々に占領・通過してゆき、ひと月近くを費して、遂に英仏海峡に面した港町グランヴィルに到達する。しかし、英国の援助が得られないことを知ると、再び故郷を目指して南下を開始するのである。冷たい風雨のなか、飢餓、伝染病、そして政府軍の奇襲に悩まされるという、まさに言語に絶する苦勞を味わいながら、彼らは辛うじてロワール河北岸まで辿り着き、故郷を目前にする。だが、河の増水と待ち構えていた政府軍に再渡河を阻まれ、さらにロワール河北の地をさすらった挙句、まず同年十二月十二日から十三日にかけて、ル・マンで、政府軍によって潰滅的な打撃を受けたあと、十二月二十三日にいたって、ブルターニュのサヴネーにおいて、政府軍に捕捉・殲滅せんめつされるのである。生き残った者はわずかに四千であったといわれる。

ガレルヌの彷徨の終わりは、当初「キリスト教徒軍」『*l'armée chrétienne*』あるいは「ローマ・カトリック軍」『*l'armée catholique romaine*』と名乗り、次いで「カトリック・王党軍」『*l'armée catholique et royale*』と称するようになったヴァンデ軍団の終焉に他ならず、ヴァンデの反乱の大戦争の局面はここで終わりを告げ、以後は、チェローの悪魔部隊とカリエの溺死刑によって代表される報復と弾圧の嵐が吹き荒れるなかで、自衛のためのふくろう党的なゲリラ戦が、一七九五年まで続けられるのである。

右のようなヴァンデの反徒たちの進軍 *la marche des Vendéens* が、*la Virée de Galerne* と呼ばれるようになった経緯はつまびらかでない。恐らく筆者の不勉強のせいであろう。ただ、ガレルヌというケルト起源の語が、この場合、冷湿さで知られる「フランス西部を吹く北西あるいは西北西の風」というより一般的な意味ではなく、その風がロワールを越えて南岸まで吹き渡ってくる「フランス北西部の地」自体を指していること、したがって、*la Virée de Galerne* が *la virée vers le Nord-Ouest* と同義であることははっきりしている<sup>(4)</sup>。「ガレルヌの彷徨」という訳語には感情移入の気味があるが、進軍の実態を考えれば、それ以外に適訳が浮かばない。

ともあれ、ガレルヌの彷徨は、信仰に結ばれた一揆の婦結であったという原因の宗教性において、その集団性と時間的・空間的な広がり大きさにおいて、そして、その悲劇性において、極めて叙事的な事件であったといえよう<sup>(5)</sup>。この彷徨がしばしば「出エジプト」Exode に比せられることも付言しておく。

### 三 ラ・ロシユジャクラン侯爵夫人の略年譜

ラ・ロシユジャクラン侯爵夫人 *la marquise de La Rochejaquelein, née Marie-Louise-Victoire de Donissan* の生涯について、もっぱら彼女の『回想録』によって半ば略年譜風にまとめると、次のようである。なお、ガレルヌの彷徨前とその後の時期に重点を置いてある。

一七七二年十月二十五日に、ルーヴル宮内で生まれ、革命の騒乱に巻き込まれるまで、両親と共に、ヴェ

ルサイユ宮内の母方の祖母の住居で過ごす。この祖母ソヴラック公爵夫人は、ルイ十五世の娘ヴィクトワール妃の女官長で、母も同妃の着付係を勤め、父ドニサン侯爵はプロヴァンス伯に仕えていた。そこで、ヴィクトワール妃を代母、プロヴァンス伯、のちのルイ十八世を代父とする光榮に浴す。

ひとり娘で、殊に母親に溺愛された彼女は、十四歳のとき、祖母に続いて同じく母方の祖父も死に、その打撃で母親が神経症に罹るまでの日々を振り返って、「私は宮廷とそこに出入りする人々の、あらゆる祝宴、あらゆる豪華の目撃者であつた<sup>(6)</sup>」というが、革命の勃発によって、ヴェルサイユ宮における一連の騒ぎをおびえながら目撃することになる。

一七八九年十月六日、国王一家に随伴してパリに赴くが、母親の神経症が悪化したため、途中からガスコーニュへ向かい、ポルドー近在メドック地区の父親の所領で暮らす。

一七九一年十月二十七日に、幼い頃から好きで、運命的な絆を感じていた母方の従兄、レスキュール侯爵 *le marquis de Lescaur* (一七六六年生まれ) と結婚する。彼は騎兵将校で、すでに二度亡命していた。まもなく、ポワトゥーのブレススユール *Bressuire* 郡クリソン *Clisson* にあるレスキュール家の城館に移り住む。

一七九二年二月、亡命を考えて夫妻でパリに上るが、密かに会った王妃マリー・アントワネットから、暗に、身近にいることを求められて、サンリトノレ街の借邸に逗留、やがて彼女の両親も同居。同年八月十日には、チュイルリー襲撃事件の騒ぎのなかを辛うじて左岸にのされる。妊娠七カ月の身重であった。

一七九二年八月二十五日、一家でパリを脱出。かつて夫の家庭教師だった警視兼国民軍地区隊長の機略縦



横の働きに守られて、クリッソンに辿り着く。

一七九三年四月九日、郡の徴兵実施日に、「容疑者」として、夫と共に憲兵隊に逮捕され、ブレッスイールに連行される。母が彼女のために犠牲になることを望み、結局両親もいっしょに監禁される。

一七九三年五月二日、「青」こと共和政府軍のブレッスイール撤退によって解放され、クリッソンに戻る。夫はこのときからヴァンデ軍に参加する。

一七九三年十月十五日、ショレ近郊トランブレール Tremblay の戦闘で、夫が重傷を負う。

一七九三年十月十八日、ロワール渡河。

一七九三年十一月四日、エルネで夫死去。怒りに駆られ、青の屍体の上に馬を走らせる。

一七九三年十二月二十三日、サヴェネーの敗北。その後は近在の分益農家などに匿かくまわれる。翌二十四日、六日前にアンスニ Ancenis の農家に預けたばかりだった長女が死ぬ。

一七九四年一月八日、父侯爵がアンジェで銃殺刑に処せられる。

一七九四年四月二十日、女の双子を出産するが、ひとりには翌月二日に、他のひとは翌年八月十一日に死ぬ。

一七九五年一月三日に、ナントで特赦を受け、二月八日頃、ボルドーに帰る。

一七九七年九月四日、フリュクチドール十八日のクーデター。その余波で、亡命者リストに名前の残っていたことが発覚して、スペイン国境に亡命を余儀なくされる。母の奔走で、八ヵ月後に帰国するが、再度退去命令を受けて逆戻りし、さらに十ヵ月亡命生活を送った。その間に、『回想録』を書き始める。

一八〇〇年五月、スペイン亡命より帰国。

一八〇二年三月一日に、亡夫の親戚に当たるルイ・ド・ラ・ロシュジャクラン（一七七七年生まれ）と再婚する。ルイ・Louis は、ヴァンデ軍の三代目総司令官として、ガレルヌの彷徨を指揮したアンリ Henri（一七七年生まれ、一七九四年一月二十八日戦死）の弟である。ルイのすすめで、『回想録』の執筆を再開。その終りの部分を書いていた頃、ルイが皇帝政府に出仕しないために、皇帝派の圧力を受ける。

一八〇七年、ブレッスイール郡長に着任したバラント男爵 *le baron de Barante* と知り合い、『回想録』の仕上げに多少とも協力を得る。

一八〇九年に、バラントがヴァンデ県知事に任命されて、ブレッスイールを去ったために、皇帝派による迫害がいつそう直接的になるが、ルイは健康と子供の多いことを理由に、出仕・軍現役への復帰を拒否。

一八一四年、王政復古。ボルドーで育児に従事しながら、『回想録』初版本の上梓に漕ぎ着ける。

一八一五年六月四日、ヴァンデ王党軍を指揮して、ナポレオン軍と戦っていた夫ルイが戦死。結局、彼とのあいだに二男六女を儲けている。

一八五七年二月十五日に、オルレアンで死去。享年八十四歳。晩年は失明状態であったが、口述筆記により、『回想録』の補完に努めたという。

#### 四 『回想録』の成立過程と二つの版について

一八一四年に刊行された『回想録』初版本の題名は、*Mémoires de Mme la marquise de La Rocheja-*

quelein, écrits par elle-même, rédigés par M. le baron de Barante》であった。したがって、本書の完成に、第一帝政期以降に行政官、政治家として活躍したばかりでなく、歴史家としてアカデミー入りも果たしたバラント男爵が関与したことは明らかであるが、すでに十九世紀半ばから、ラ・ロシュジャクラン夫人とバラント氏のいずれに著作者としての資格があるのかをめぐって、相当に激しい論争が生じ、それが今日にいたっても尾を引いていると思われる。

まず、ラ・ロシュジャクラン夫人が『回想録』の第六版（一八四八年刊行）に付した自序によって、その執筆から上梓にいたる経緯を見ると、次のようである。挿話的記述にも興味を引く点があるので、その部分も含めて要約し、紹介する。

『回想録』を書き始めたのは、一七九九年から一八〇〇年にかけて、スペインで二度目の亡命生活を送っていたときで、何度か中断しながら、四年乃至五年間、自分で執筆に当たった。ロワール渡河まで書いたあと、何年かして、夫のすすめで執筆を再開し、書き上げた草稿を友人たちに筆写してもらい、それに訂正を施したうえで、ボーヴェ某 M. Beauvais に二番目のコピーを作らせた。そのコピーに何人かのヴァンデの人たちが注を書き加えたが、自身もいくつもの注を書いた。

その頃、参事院評議官からブレッヌスイール郡長に左遷されてきたばかりのバラント氏と、夫が知り合っているバラント氏が私たちの不幸の話に真剣な関心を抱いて、ヴァンデの戦いの真相を知りたがったので、夫は私の『回想録』を氏に見せる約束をした。常々夫は、私の書いたものの不備な点を誰かに直してもら

うことを望んでいたが、バラント氏が進んでその役を引き受けたいと懇願するので、氏にボーヴェ・コピ―を預けて、他の誰にも見せないようにと強く念を押した。

しかし、再び夫の希望を容れて、バラント氏や私たちの友人の何人かに限って、私の話を讀ませてもよいことにしたところ、バラント氏はまずジュネーヴの父親宅で、スタール夫人他少数の者を相手に朗読会を開いたあと、パリでも、モンモランシー公爵やラヴァル公に『回想録』を見せてしまった。その結果、この『回想録』が話題になり始めると同時に、私の名前をかたった偽作ではないかという者も現われるようになった。そこで、皇帝政府の迫害を招きかねないことを理由に、バラント氏に朗読を止めてもらったが、それは、氏の書いたものが多くの点で不満であっただけに、こういう形で公にされるのが遺憾に思われたからでもある。ところが、すでに私の『回想録』は、タレラン公によってコピ―が作られ、ボナパルトにも渡り、さらに多くの人々の目に触れていたことが判明した。

困り切ったバラント氏は、出版担当局長のポムルル氏 M. de Pommerai を訪ねて、この盗まれた著作が出版されないように頼んだ。その折ポムルル氏は、手稿を盗んだ人物の名前を教えてください、必ず取り戻すと保証してくれたが、バラント氏は自分の庇護者でもあるタレランの権勢を恐れて、名前を出さないようにした。

一八一四年、王が復帰したとき、ポルドーで育児に追われていたが、母親から、なるべく早く、自分で出版するようにといわれて、私の『回想録』を讀み直し、短縮したり、削除したりした。校正刷にも訂正を加えたが、これにはバラント氏も目を通した。

女流作家の肩書が大嫌いだだったので、初版本には一存で、《écrits par elle-même et rédigés par M. le baron de Barante》と記載したが、以後の版からは、バラント氏の意向によって削除された。補遺はポルドーで大急ぎで書いたが、これにもバラント氏はほんの若干訂正を行なっただけである。<sup>(7)</sup>

ラ・ロシユジャクラン夫人は、『回想録』のコピー問題で苦境に立ったバラントが、ポムルールという出版担当局長に会った話を伝えているが、この人物は元アンドルエロワール県知事で、当時トゥール市助役を勤めていたバルザックの父親と親交のあったフランソワ・ド・ポムルール將軍（一七四五年—一八二三年）に他ならない。その縁で、やがて『ふくろう党』の着想を得たバルザックが、フージェールのポムルール邸に逗留して取材に当たったことはよく知られている。両者の関係はそればかりではなく、バルザックにとつて、大革命期に関する最も身近で重要な情報源となったのは彼の父親であったが、その父親の情報入手先の一つが疑いもなくこのポムルールであったのである。<sup>(8)</sup> 結局、彼はラ・ロシユジャクラン侯爵夫人『回想録』の、いわばテキスト・プレリオリジナルを目にすることはなかったのかどうか。夫人の記録だけではどちらも断定し難いが、ただ、ポムルールがどういふ情報の飛び交うなかにいたかを物語っている点で、いかにも生々しく、貴重な挿話であろう。

ところで、右のような第六版の自序自体、新聞やバラントの伝記中で、『回想録』が氏の著作として扱われたことに対抗して書かれたのであったが、一八六七年になるとギゾーが論文を発表して、バラントに著作権が認められる根拠の一つとして、大意次のような、バラントの未刊の回想録の抜粋を紹介している。

始終クリッソンの城館で、ラ・ロッシュジャクラン夫人の歓待を受けているうちに、私は同夫人の『回想録』を書く計画を思いついた。実は、この土地に着任したときから、あの戦いの歴史に取り組もうと決心していたのだった。夫人はすでに彼女の『回想録』を書き始めていて、最初の数章などはもう書き上がっていたが、彼女はそれらと集めていたメモを私に渡し、私の調査を助けてくれ、また戦いに参加した士官たちに引き合わせてくれた。私は士官たちに彼らのしたこと、見たことを語ってもらったが、夫人自身も書いたのでは再現できなかったと思われる真実の持つ魅力でもって、彼女の眼前で起こったこと、彼女の味わった苦しみ、彼女が深く愛しながら失った指揮官たちの性格や行動について、細大もらさず、そのすべてを教えてくれた。私は現地を訪ねて、農民たちに戦場を案内してもらい、こうして、自分が語り描きたいと思う諸事件を、眼前に生き生きとさせるように努めたのだ<sup>(9)</sup>……

バラントの話は、夫人の自序の内容と決定的に違っている。すなわち、バラントによれば、そもそもヴアンデ戦争の歴史を執筆するつもりであった彼が、たまたまラ・ロッシュジャクラン夫人に出会ったために、自分の仕事の一環として、夫人を主人公にした回想録を書く気になり、すでに書き終わっていた最初の数章とメモだけを本人から借りて、あとは彼女とのたびたびの長い会話と生き残りの士官たちの体験談、それら自らの現地調査に基づいて書き上げたことになる。

ギゾー論文は、当然、夫人の相続者たちの反発を買った。一八八九年に、夫人の同姓の孫がもっぱら夫人

の自筆原稿による『回想録』を出版すると同時に、その序言中で、初版本の成立過程について、複数の識者による鑑定結果を報告している。それによると、要するに、バラントは「すでに完成していた著述をより良い著述に代えただけ」なのであった。<sup>(11)</sup>

これに対して、バラントを著作者とする例も、一九一〇年にバラントの原稿による『回想録』のテクスト・オリジナルを刊行して、その序言のなかで、ラ・ロシュジャクラン夫人著作者説に対して詳細かつ総括的な反論を加えている。<sup>(12)</sup>

バラントがラ・ロシュジャクラン侯爵夫人『回想録』に取り組んだ意識の問題、それはひとまず措くとして、問題は、夫人によれば、彼女がバラントに渡したというポーヴェ・コピーの実態であろう。『回想録』第六版の自序には印刷されなかった草稿版が残されていて、バラント派がその一部分を紹介しているが、ここではポーヴェ某による二番目のコピーは登場していない。印刷版と違って、夫が望んだのは、単に夫人の著述の不備を直すことではなく、「回想録を整理し、補完し、注意深く正確に書き上げてもらうこと」であったとされ、またバラントに託したのはポーヴェ・コピーではなく、「彼が引き受けることを申し出た仕事」となっており、さらに他見無用と念を押したのもポーヴェ・コピーではなく、バラントによって新たに書き上げられた回想録であったことになっている。

『回想録』第六版の自序にはもう一つ問題点がある。それは、夫人が『回想録』本文のなかで、ロワール渡河のところまでは二度目のスペイン亡命中に、すなわち一七九九年夏から一八〇〇年五月までの十ヵ月のあいだに書いてしまったと記しながら、自序では、二度目のスペイン亡命中に執筆に取りかかったことを明

かしたあと、次のように述べているからである。すでにあらかじめ訳出して紹介したくんだりだが、ここで原文を記す。

... Je passais quelquefois des semaines entières sans avoir le courage de reprendre cette tâche. Je ne pouvais même me décider à relire ce que j'avais écrit. J'ai été ainsi quatre ou cinq ans à les écrire de ma main.

J'avais conduit mon récit jusqu'au passage de la Loire; plusieurs années après, je le repris, sur les instances de M. de La Rochejaquelein. Je fis copier le premier jet par des amis, je refus l'ouvrage, le corrigai, le rectifiai, puis M. Beauvais [...] en fit une seconde copie. Je la fis relire [...] à plusieurs Vendéens, ils y ajoutèrent des notes...<sup>(22)</sup>

右の文章で、さまざまな時称の絡み具合にいかに留意しても、矢張り、「私」はロワール渡河まで書くのに四年乃至五年を要したと読まざるを得ないのではないか。したがって、バラント派が指摘する通り、『回想録』本文中の記述とは確かに矛盾した証言であって、ラ・ロシュジャラン夫人派が、彼女はすでに一八〇三年には一応最後まで書き終わっていたとして、ポーヴェ・コビーの完成度を強調する根拠にはなり得ないであろう。自序の草稿版では、右引用中の plusieurs Vendéens が trois ou quatre Vendéens と数値で記されている。仮にその例を参考にして、夫人がロワール渡河まで書いたあと、三年乃至四年中断してか



ら執筆を再開して、いわゆるボーヴェ・コピーに漕ぎ着けたとすれば、その時期は一八〇六年末から一八〇八年末のあいだという計算になる。ところで、バラントの方は一八〇七年七月八日付の辞令でプレッスユール郡長に任命されている。そのことを考え合わせると、ラ・ロシュジャクラン夫人自身は、彼女がバラント著作者説に初めて対抗したこの自序において、バラントが郡長に着任したおおよそその頃には、自分の手になる『回想録』はともかくにもボーヴェ・コピーの形で完結していたと、いわば巧みな曖昧さで証言しているとも思われるのである。

ボーヴェ・コピーについて、バラント派は結局大意次のように結論している。「ラ・ロシュジャクラン夫人からバラント氏に託された原稿が、すでにはほとんど決定的な形をとった、しかも、ヴァンデの人たちの注まで付記されたボーヴェ・コピーであるなどということは、およそあり得ないのであって、ヴァンデの人たちの注記分も、その多くは、バラント氏が執筆に取りかかってから直接彼のところに届けられたのである。実際に、夫人からバラント氏に渡されたのはメモと下書きのたぐいであって、それらは一八一〇年十二月に夫人の頼みにより焼き捨てられた」という。要するにバラント派は、いわゆるボーヴェ・コピーがすでにラ・ロシュジャクラン夫人の原著ではなかった、と見ているのである。

もつとも、この論争には明らかに政治的要素が絡んでいた。そもそも、バラントが参事院評議員からプレッスユール郡長に左遷されたのは、彼自身の自由主義的な意見に加えて、ジュネーヴ知事であった父親とネットワークやスタール夫人グループとの付き合いが、皇帝の不信を買ったためであって、王政復古期には、彼は純理派に属していた。論争でギゾーが重要な役割を演じたのも、もちろんそのことと無縁ではないに違

ない。バラント版『回想録』の刊行者たちが、彼らの企ての理由として第一に挙げているのも、バラントの手になる「テキスト・オリジナルが次々に手直しを蒙ってきたこと、すなわち、ヴァンデの人々を英雄化するのに都合の悪いこと（報復、焼打、虐殺）は削除され、また、ヴァンデ軍の指揮官たちの真実過ぎる肖像も同じ方向で修整された」ことである。さらに彼らは、カトリック系の新聞が『回想録』へのバラントの関与度を矮小化しているとも非難している。

ともあれ、こうして、ラ・ロシュジャクラン侯爵夫人『回想録』には、夫人の自筆原稿によるものと、バラント男爵の原稿によるものと、二つの版が生まれるにいたった。拙稿では、もっぱら前者を、最近 *Mercure de France* から *Le Temps retrouvé* 叢書の一巻として刊行された翻刻版<sup>(46)</sup>によって読みながら、後者をも、一九一〇年版の再版である一九一二年版<sup>(47)</sup>によって随時比較参照してゆく。というよりも、後者についてはそれにとどまる、いや、とどめるだろう。それは何故か。その理由も本論稿の課題の一つと心得ているが、今直ちに言えることは、バラント版は記述行為として前者とはまったく別物だからである。

(一九八九年十二月二十二日 序章筆了)

〔注〕

- (1) Victor Hugo : *Quatrevingt-Treize*, Édition de J. Boudout, Classiques Garnier, 1963, Garnier Frères, p. 220.
- (2) 平成元年七月二十一日付「研修レポート」、五一―六頁。ただし、本稿では「西部」の二字を追加。
- (3) ラ・ロシュジャクラン夫人の記憶によれば、ヴァンデ軍が「神と王のために」を実際にスローガンと

- して採用し、十字架形の白布に記して軍服に縫い付けたのは、ずっとあとのこと、すなわち一八一五年にナポレオン軍と戦ったときだという。Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, Col-lection Le Temps retrouvé XXXX, 1988, Mercure de France, p. 403. note (1) を参照。
- (4) 例として Jean-Claude Souyri: Louis-Marie de Lescuré, général vendéen, 1987, le Cercle d'Or, p. 76. を参照。
- (5) ヴァンデ・ふくろう党の戦いのなかで、キンロン島上陸事件も叙事詩的な悲劇として知られるが、ガレルヌの彷徨の持つ叙事的要素には及ばないだろう。
- (6) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, éd. cit., p. 49. この略年譜はじめての同版でよく作成した。
- (7) Ibid., Avant-propos, pp. 38-43. を参照。
- (8) 最近では、一九八八年秋から一九八九年一月にかけて、バルザック記念館で開催された特別展「バルザックとフランス革命」のカタログ中の解説文《Bernard-François Balzac et la Révolution》にさうして M. Ambrière 女史がこのテーマに触れている。Maison de Balzac: Balzac et la Révolution française, 1988, Paris Muses, pp. 17-41.
- (9) キンロン論文は、一八六七年七月一日付発行の「西世界評論」誌に掲載された。なお、ここに大意を訳出した「シラント氏の未刊の回想録の抜粋」は Mémoires de la Marquise de La Rochejaquelein sur la Guerre de Vendée, 1912, Albin Michel, Préface, p. III. を参照。
- (10) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, éd. cit., Préface, pp. 31-34. を参照。
- (11) Mémoires de la Marquise de La Rochejaquelein sur la Guerre de Vendée, éd. cit., Préface, pp. I-VIII. を参照。本章で「ラ・ロッシュジャクラン夫人著作者説に対するシラント派の反論(そのための資料も含む)」として引用・紹介しているものは、いずれもこの短い序言によっているので、以後個別で頁を注記する際には省略する。
- (12) Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, éd. cit., p. 287.

- (13) Ibid., Avant-propos, p. 39.
- (14) Ibid., Introduction par André Sarazin, p. 26.
- (15) ちびつて回度も引用・参照じつる版であるが、誰じつ題名は次の通りである。Mémoires de la marquise de La Rochejaquelein, née Marie-Louise-Victoire de Donissan, Édition présentée et annotée par André Sarazin, Collection Le Temps retrouvé XXXX, 1988, Mercure de France.
- (16) りの歴史じつてか、おなじじつてつて歴史を記じつてある。Mémoires de la Marquise de La Rochejaquelein sur la Guerre de Vendée, publiés d'après les manuscrits du Baron de Baranté, illustrés d'après les estampes du temps et annotés par Maurice Vitrac et Arnold Galopin, Nouvelle collection de Mémoires historiques, 1912, Albin Michel.